
デジモンアドベンチャー02 夢の続きのリザレクト

E-mo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー02 夢の続きのリザレクト

【Nコード】

N60300

【作者名】

E-mo

【あらすじ】

平和になったはずのデジタルワールドが再び暗黒の力に 天真爛漫な不思議な少女型のデジモン、消えたはずのデジモンカイザーの復活、そして世界中の電子機器の異常と重なるようにしておかしく揺れ動くデジタルワールド…。それは子供達の紋章を狙うある一体のデジモンが原因だった！？ 再び冒険が、始まる。

2002年からの挑戦状（前書き）

02で、もう一度無印メンバーが中心に活躍する話が見たい！と思
い書きました。少し02メンバーが割を食うかもしれませんが。それ
でもよろしければ…！

2002年からの挑戦状

とつぷりと日は暮れた。お台場は夜に包まれて、子供達は思い思いの夜を過ごしている。

夕食も済ませた自由時間。明日提出の算数ドリルや、音読のテストの練習。

夜のバラエティ番組を家族みんなで見ていたり、はたまた夜遅く帰る親の代わりに何か手伝いをしている子。

リコーダーが上手く吹けなくて四苦八苦している子や、テレビゲームで兄弟仲睦まじく対戦なんてしている小学生も要るだろう。

それとも、はしゃぎすぎて疲れてしまい、既に寝てしまっている子供もいるのかもしれない。

そんな緩やかで静かで、どこか温かな夜の時間を、家で過ごさずに、未だに学校にいる子供がいた。

ここはお台場小学校のパソコンルーム。

校舎内はじつと佇む闇の世界が不気味にたゆたっている。外の喧騒が嘘のようだ。

そんな無音の世界で、たった一つ、細い指がせわしくキーボードを叩く音と、静かなファンの音だけが静寂を支配している。

夜のパソコンルームの暗がりを読らすのは、教室の片隅に座り込んだ少女の抱きしめるモニターの明りだけ。

そのモニターはパソコンが少女の指が文字を打ち込むよりも早いスピードで動いていることを明確に映し出している。

少女の眼鏡は強い光に反射して、白く浮かび上がっており、彼女の緊迫した表情を隠していた。

それでも、彼女はうつすらと笑みを湛えているのがはっきりと分かる。

重大な任務に、果てしない遣り甲斐を確かに覚えているのだ。

「京さんっ！」

「しっ声が大きい！」

飛び込むようにして小学校のパソコンルームに入ってきたのは、癖のない黒髪をきっちり前髪で揃えて切っている少年だった。その髪型が表すように、彼はとても四角四面な性格をしている。

京と呼ばれた少女は慌てて指を口の前で立てる。それにあわせ、少年も口を片手で押さえながらパソコンルームを歩き、奥に座る京の元へと進んだ。

「……任務完了です。」

そう言つて、少年は手にした鞆をその場に下ろした。

中には多数のファイルが入っていて、写真つきの紙切れやノートで一杯だ。

「タケルさんやヒカリさんから聞いてメモしてもらったデジモンのデータや、癖などをできる限りまとめました。」

「お疲れ様、伊織。」

京は言いながらも、モニターに噛り付いたまま、全く伊織を見ようとしない。

「……ごめん。今ちょっと一番大変な時なの。」

「……そうですか。やはりセキュリティ、重大なんですか？」

そう言いながら、乱れた呼吸を整える。伊織はパソコンのセキュリティがどうだのあだの、実際は理解していない。

ただ彼が出かける前に簡単な説明にそうあったので、尋ねてみた。

「……なかなか手ごわい。やっぱり流石よ。ファイアウォールを何重にも張ってあって……あたしなら絶対やらないわ。……でもちょっと手を加えれば……。京さんに破れないものはないってね！」

「……そう、ですか。」

伊織は内心溜息をつく。正義感の強い伊織は元々この”作戦”には大反対だった。

「やはりこういうことは……。」

「大丈夫！小さなイタズラみたいなものだって！……それにこうでもしないと、本気で来てくれないじゃない？」

京はうすうす気がついていた。元々ある「先輩」とそれなりに長い付き合いをして、ずっと後姿を見てきた経歴があるのだ、なんとなく分かる。

彼らは本気を出さないのではない。「出そうとしない」のだ。その理由は、分からない。それでもただ、絶対に彼らは本気で自分達と戦おうとしない。

向き合おうとしない。これまではそれでいい、それがいいと、京もそして仲間たちの総意だった。無駄な争いは、ただ血を招くだけ。血で血を洗うだけなのだと。

けれど、彼らはそれではいけない時があることに気がついた。電源を入れたまま放置されていたパソコンルームのパソコンの一つが、突如強い光を放った。

光は人をかたちどると、見る見るうちに短髪にゴーグルをつけた少年の姿へと形を変えていた。

「へへっ任務完了だぜ！」

「大輔さん、大丈夫でした？」

「平気平気い！俺にかかりやこれくらいどーってことないって！」

「ヒカリさんたちはまだ向こうにいるんですね。」

「おう、見張りが必要だからな。」

「ちゃんと作戦通りにしたでしょうね？」

「ばっちりだぜ。今頃慌てて助けを呼びにいつてるだろうな！」

「……なんだか、本当に悪い事をしています……。」

肩を落とす伊織に、大輔はにつこりと笑いかけてやる。

「大丈夫だって！お前は何もしてない。そうだろう？」

ただでさえ責任感と正義感の塊である伊織に、こういった「悪役」じみた仕事は非常に負担が大きいことは大輔にもはつきりと分かる。満場一致で彼は残って作戦の最終チェックを任す事にされていた。「知識の紋章」の継承者なのだから、うってつけでもあるだろう、と。

「……それはそれで、悪い気がしています。」

「気にすんなよ！…伊織、お前だって必要だって思ったから、ここに
いるんだろう。」

「……はい、そうです。確かに僕らは足手まといかもしれません。
それでも…強くなりたい…強くなりたいんです！」

大輔はぽん、と伊織の頭に手を乗せて、優しく撫でた。

「おう、俺もだぜ！」

その後、まだ教室の片隅に座り込んでノートパソコンと向かい合っ
てる京に目をやった。

「…おい、京、まだなのかよー？」

「ちよつと待ってて、あともう少し、もう少しだから…これをこ
うして…あーしてつと……。よし、できた！！」

京はつと、不敵な笑みを浮かべた。そして興奮に震える顔で大輔を
見上げた。

「……覚悟はいい？」

「はい。」

「京こそ、大丈夫かよー！」

「……では、選ばれし子供達、出動ー！！」

言いながら、エンターキーを押す。

流れの速かったモニターがの文字がいつそうスピードを増して流れ
ていく。

その様子を不思議な表情で見守る子供達。

見る見るうちに文字の濁流はとまっていき、最後に残ったのは

「果たし状 泉先輩の大切なパソコンデータは預かりました！ 返

して欲しくばデジタルワールドに夕方、集合！ 先輩達に宣戦布告

いたします！！ 井ノ上京とその仲間達」

と書かれたページのみだった。

泉光子郎の目の前は真っ白だった。

画面には、見慣れた後輩の名前が書かれていた。
ただそれだけだった。

頭が、そして何よりパソコンの中が。

何時ものようにネットサーフィンをして様々な情報を掻き集めながら、世界中の同志や友人達とメールのやり取りをしたりといつも通りの充実したパソコンライフを送っていた。

「……あれ」

不要なファイルを消した瞬間、光子郎のパソコンの処理速度が急に遅くなった。通常ファイルを削除すればそれだけの空きスペースが生まれ、むしろ処理能力は上がる筈だ。首を傾げながらも、開いたばかりの新作のメールを読み上げる。これを読み終えてからパソコンのチェックをしようと思ったのだ。

「新手のウイルスが発生し……え?!」

その刹那、情報の激流が生まれた。普段自分の手先のように操っていたパソコンが自分の支配下から逃れ、勝手に動きだしたでは無いか。命令する力を持った英字達が画面上を踊るように滑る。

「えっ……!? ええ、ちょっと待って、今大事な………。う、うわあああっ!?!」

突然シャットアウトしていく複数のウィンドウ。保存していないデータたち。

保存していないファイルもたくさんあった。

慌てて対処しようとキーを打った途端、表れたのは後輩の名前と果たし状。

泉光子郎はすぐさま他に何か残されているデータはないかと探ってみる。

幸い完全に外界からシャットアウトし、保存しておいた重要なデータだけは京も手が出せなかったようで、残されている。

しかしそれらは本当に最低限パソコンを動かすデータと、デジモンに纏わる文献やアクセスの情報のみ。

大量に設定やソフトの情報が入っていたはずのコンピュータと比較して、それは実用性にかけるものばかりだった。

「一体彼らは何を考えてるのでしょうか……。」

光子郎は溜息を尽きながらひとりごちる。そして京の家の電話してみたが、今日は友人同士で泊まり会をするから留守なのだと彼女の親に説明された。

丁重にお礼を告げると、光子郎は受話器を下ろした。

その時だった。文字だけが残されていた画面の中に、かつて共に戦った相棒で、誰よりも信頼出来るパートナーが表れた。

「光子郎はん！」

ディスプレイから呼びかけるその声。真っ白な画面にちらちらと映る鮮やかな赤に緑色の、天道虫みたいな不思議な生き物。

「テントモン！？一体どうして……！」

通常、デジタルワールドで生活する彼らデジタルモンスターは、自分達で現実世界にアクセスする事は出来ない。

「どうしたもこうしたもあらへんで！大変や光子郎はん！アグモンやガブモン達皆、大輔はん達に攫われてもうたんや！！」

「アグモンたちが……！？テントモンは無事だったんですか！？」

「それが……これ以上盗んだら光子郎はんに悪いからって、わての事は見逃してくれたさかい。……なんか盗まれたんでっか、光子郎はん。」

「……パソコンのデータまるまるですよ。」

「な、なんやってえ！？それで今までのアドレスが使えんかったんでっか」

「そうです。まあ京君もさすがにセキュリティホールまでは手を出せなかったようで緊急用のバックアップデータは残ってたんだけど……それにしてもやられたよ。」

「早い所皆はんにも知らせた方がええでっしやる、光子郎はん。」

「そうだね、テントモン。」

そう、テントモンだけを返した理由はきつとそこにあるのだ。光子郎は気が付いていたのだが、つい目先の怒りで我を忘れそうになっていた。

けれど目の前の相棒がいつも通り平静に、朗らかに答えるので、光

子郎も自分を取り戻す。
そして自分のかつての仲間達に連絡を取ることにしたのだった。

その頃、丁度光子郎の仲間、太一も焦っていた。

妹が何も言わずに帰ってこないばかりか、自分の机の上には果たし状と書かれた一枚の紙切れが部屋に置いてあった。

アグモンは誘拐した、帰して欲しくば戦いを申し込みたい、ととても丁寧な文字で書かれている。

何故唐突に彼らに闘う必要が生まれたのか。あれだけ戦闘を拒んでいた後輩達が。

これを非常事態と称しなくて何を称すのか。すぐに太一は仲間へ電話しようとした、その矢先だった。

タ、タイチ……。

つと、太一の頭の中で声が響いた。

「アグモン……！？アグモンなのか！？」

特徴的なハスキーボイス。忘れもしない。忘れる筈がない。長い長い苦しい冒険を共にした、戦友で、大切な仲間。

タイチ、ごめん。捕まっちゃった……。

「おい、アグモン！？」

思わず声を張りあげるが、それ以上返事が帰ることはない。何度呼んでも帰らぬ返事。

太一が焦燥に駆られて受話器を取ろうと手を伸ばすと、丁度電話が掛かってきた。

「八神さんのお宅ですか、夜分遅くに……。」

「光子郎！光子郎だな！」

「太一さん！」

「お前んとも何かあったんだな！？」

「ってことは太一さんもですか……。」

「ったく、あいつら何考えてるんだか。」

「太一さん、テントモンが報告に来てくれたのですが、アグモンが……大輔君たちに捕まったそうです。テントモンは其れを皆さんに伝達させる為に逃されたようです。」

「ん、つてことは、お前は何か盗られてないのか？」

「いいえ！そんなことはありません！パソコンのデータ殆ど盗まれたんですよっ！！」

「……へえ、なかなかやるなあいつら。」

「感心してる場合じゃありませんよ！！これでは外部との連絡も付きませんし、新しい情報も分かりません。彼らの狙いはこれでしょう。完全にやられました！」

「ま、まあまあ落ち着け。手紙の内容は一緒か？」

光子郎は丁寧に一字一句間違えずに読み上げる。
すると、太一がふう、と溜息をついた。

「……場所が違う。あいつらわざわざ戦力分散させる気が。どうやら本気みてえだな。」

「それはそうでしょう。ここまで手のこんだことをするくらいですからね。」

「……あいつら、何が目的か予想は付くか？」

「いえ、僕にも皆目検討が付きません。さっぱりです。」

「……まあそうだよなア……。」

「ただ……。」

「ただ？」

「どうやらネット上でまた新種の非常に悪質なウイルスが出回っているそうで……。友人からのメールの報告だったんですが読む前に京君に盗まれましたので詳細は不明です。ですが何かデジタルワールドとの関連性はあるかもしれません。あくまで僕の憶測ですが。」

「そーか、ありがとな。とりあえず奴らも今晩は行動起こしはしねえだろうし、明日の朝、すぐに行こうと思ってる。あと念のため今から皆に連絡とって回るつもりだけど……。」

「それなら僕も協力します。」

「助かるぜ。なら光子郎は丈とミミちゃんに頼めるか。」

「分かりました。ただちに電話します。……皆さん起きているといいのですが……。ミミさんの方は幸いこの時間でしたら向こうは朝でしょうから平気だと思いますが。」

その言葉を聞いた太一は壁に掛けられた時計を見上げる。

「げ、しまった、もうこんな時間かあじゃあな、光子郎も早めに寝とけよ。」

「大丈夫です、分かりました。太一さんこそあまり夜更かししないようにしてくださいよ。おやすみなさい、それでは。」

二人は一度受話器を下ろすと、すぐに自分の知っている番号を入力した。

「まさか、全員揃うなんてな。ちよつと意外だったぜ」

太一は不敵に笑う。その好戦的な表情からも、喜んでいるのが見て取れる。

「……今まで全然なかったよな、皆なんだかんだ用事が入ってた。」

ヤマトは意外そうに言った。少し呆れながら。

「槍でも降りそうね。」

空は軽く呟く。いつも通りに、平然と。

「……これもひょつとして大輔君達が示し合わせたんでしょうか……。」

光子郎は疑問を投げかける。相手の事情を探るのは、もっぱら彼の仕事だ。

「まっさかあ！ 偶然よ、ぐうぜん！」

ミミがそれを軽く一蹴する。明るく笑いながら、朗らかに。

「さあ、どうだろうねえ。どっちにしる今から全員会うには変わらないはわけだ。」

丈は暢気に言った。それはきつと、年長者の余裕と貫禄。

デジタルワールドはいつも通り平穏そうに時間が流れていた。

どこも快晴で、風が強く早いスピードで雲が流れている。

時にはデジモン同士が縄張り争いで闘っている声も聞こえるし、どこかでは仲良く暮らす相談をしている声も聞こえる。

とても穏やかで、愛おしささえ沸き溢れる世界。

けれど、彼ら6人の回りは常に一定にぴつと張った空気が流れていた。

テントモンが光子郎の回りを羽ばたく音がいつもよりも大きく聞こえる。

光子郎は手にした全員分の「果たし状」を照らし合わせて組み分けをする。

少しずつ内容が違うことが明らかになった為だ。どうやら彼らは二対二で相手をしたらしい。

「……仕方ありません。とりあえず彼らの要求通りに二人組に分かれて行動しましょう。まずは……。」

「ちよつとゲンコツが必要だよなあ？」

太一がニヤリと笑いながら、隣に立つヤマトを見る。

「ああ、あいつらが望んでるんだ、構わないだろ。」

「おい太一！一人で勝手に進んでいくな！！」

「何だよヤマト、置いてくぞ！」

「喧嘩しないようにしてよ、二人とも。」

二人は同時に振り返りながら、阿吽の呼吸で答えた。

「任せとけて。」

「…本当に仲いいなあ、あの二人。」

正反対の方を向いている二人だが、根本はきつと似通っているのだろつ。

「あとは、空さんとミミさん。」

「あら、女同士なのね。」

「ふーん、じゃあ向こうもきつとヒカリちゃんと京ちゃんね！いきましよう空さん！」

「ええ、ミミちゃん！パルモンやピヨモンが待ってる！！」

「それに、あたしたちに喧嘩を売ろうだなんて100万年早いのよ！」

「そうね、いかに先輩達が立派か、見せてあげなくっちゃ！」
冒険していた時代、女の子二人組みということでよくタッグになっていたせいかな、この二人の絆も強い。

一度ミミがテンションを上げてのつていく事が出来れば、羽目を外さない限りは空もそれについていくのだった。

海沿いに走っていく賑やかな女の子達を尻目に、大人しい少年二人が居残った。

「……それと、僕と丈さんです。」

「……よろしく、光子郎。」

「こちらこそお願いします、丈さん。それでは、参りましょうか。」
つかつかと早足で一人進んでいく光子郎。

丈はこつそりとテントモンに耳打ちを試してみた。

一番後ろで皆を支える丈は、人一倍他人の気持ちの機微に敏感だ。
3年前よりも随分と感情表現が豊かになったとはいえまだまだ押し込めてしまう癖のある光子郎の心の瑣末な揺れですら、丈には手に取るように分かるのだ。

「……ねえテントモン。光子郎かなり気が立ってるよね？」

「データ盗まれたことで相当ご立腹のようですね……。いや物自体より自分のセキュリティの甘さがえろうショックだったみたいですね。」

「……あ、そうなの……。」

太一とヤマトが指定された場所は、とある岩山の付近。

アポカリモンが復活して、ダークマスターズが世界を己の物にしようとして滅茶苦茶に掻き混ぜたあの時から、デジタルワールドにあった嘗ての地名は意味をなくした。

そのため皆同じデジタルワールドの地図を持つてはいるものの、地名は非常に曖昧なものとなっている。

ただ少し拓けた平野にぽつんと巨大な岩山があるものだから、場所としてはとても特徴的で分かりやすい。

よく子供同士の待ち合わせなどに使用することが多い場所だった。

「さて、ここであつてるよなあ？」

「ここ以外ないだろう。平地も多いし、戦いには持ってこいだ。」

「太一先輩、ヤマト先輩！」

少し高い少年の声が響く。それはいつものよく知った後輩、本宮大輔の物だとはつきり理解できる。

その後ろを追うように、一乗寺賢の姿もあつた。

全くいつも通り、変わらない姿にヤマトは驚きを隠せない。

一方太一は目を細め、酷く警戒している様子だった。その些細な表情の変化は、これまでずっと隣で戦ってきたヤマトにしか分からないものだろう。

一見普通どおりに見える。それがこの男、太一の非常に恐ろしい所だった。

「よう、大輔、賢。」

と、気がつくと二人の後ろから二つの小さな影がこちらに走ってきているのが見えた。

「タイチー！！！」

「…アグモン、無事だったか！」

とても嬉しそうに飛びついてくるアグモンを、全身で受け止めてやる。

「ヤマトー！」

「ガブモン！」

ヤマトはすつとしゃがみ、ガブモンに目線を合わせて頭をそつと撫でた。

「よかった、何も無かったみたいだな。」

「うん。大輔も賢も、ヒカリもタケルも…皆優しかったから。」

「そうなんだよタイチー。すーっごいいっぱいオニギリもらっちゃった。」

「このやろ、こっちは心配したんだぞ！お前がまた呼ぶからー！」

「いやぁ……えへへ。あれは……突然だったし、ビックリしてさぁ。」

「デジモン達のこととは安心してください。何もしてません。」

賢が優しく答える。

「ああ、それじゃめいっばい闘えねえもんな！」

「……急に俺たちと闘おうと思ったのは何でなんだよ。」

ヤマトが尋ねると、大輔は不敵に目線をさげて、口元で弧を描いた。

「……知りたいっすか？」

そうして、賢と大輔はお互いに互いの顔を見合わせると、もう一度二人に向き直る。

「それは、闘って、僕らに勝ってからです、先輩！！」

大きな影が辺りを覆う。

気がつけば岩陰から、インペリアルドラモンがその巨体を露にした。

「いけっインペリアルドラモン！！」

インペリアルドラモンは声に答え、臨戦態勢に入る。

「おい、正々堂々勝負したいと言っておきながら進化させないつもりかよッ！」

「行くぞヤマト！」

「……ああ。」

賢と大輔に負けなくらいしっかりとした目線を交し合うと、二人はうなずきあう。

そしてポケットにしまっていたデジヴァイスをしっかりと構えるのだった。

「うーんいい気持ちい！」

「どこに来るのかしら……。」

空とミミの二人は広い海辺の浜にいた。

ここでひよっとしたら昔、初めてアグモンが成熟期のグレイモンに進化した場所だったかもしれない。

メガシードラモンやアノマロカリモンが襲い掛かってきた浜辺だったかもしれない。

それとも、両方だったのかもしれない。

「海ってやっぱりいいわ。せつかくだしのんびりしたいのになあ。」

暢気にミミはサンダルを脱ぎ捨てて、海に足を浸している。

その横で、その様子を少しだけ羨ましそうに、ちよっただけ困惑した顔をして空が見守る。

慎重派の空は不安で仕方が無かった。彼らが何を考えているのか、全く判らない。

「……そういうわけには行かないわよ、ミミちゃん。」

ふう、と空が溜息をついたそのとき、足元の地面が土煙を上げて歪む。

その中から現れたのは、デイグモンだった。間一髪の反射神経でそれをかわすミミと、庇う空。

「そんなのんびりしてていいんですか？ミミさん。」

ゆっくりと毅然に歩み寄ってくるのはタケルと伊織だ。

「僕たちは戦いに着たんです。先輩方もそうでしょう。」

真面目な伊織のカンに触れたようだ。少しばかりの憤りを言葉尻に滲ませながら、伊織は言い捨てる。

「ああら、ヒカリちゃん達じゃないの？てつきり女同士になると思ってたのに」

「僕たちじゃご不満ですか？」

「ううん、素敵じゃない？」

デイグモンは直ぐに進化を解いて、アルマジモンに戻る。

「はい、ピヨモンとパルモンはお返しします。その代わりに僕らと戦ってください。」

「空あゝ！空！会いたかったよ、空！」

「ミミ！私も会いたかった！！」

「ピヨモン！怪我は無い！？」

「パルモンッ 大丈夫!？」

飛行しながら飛びつくピヨモンを空は受け止める。少し足の遅いパルモンに、ミミは飛びつくように抱きしめる。

「全然平気よ!ほらっ!」

空の腕から飛び出して、空中をくるりと一回転して見るピヨモン。

「見せなくていいからっ!」

「さあ、早く進化してください!」

既にアルマジモンとパタモンは通常進化を開始して、ジョグレス進化をする体制に入っている。

このままだともう一度攻撃してくるのは時間の問題だろう。

空は思案しようとした、そのときだった。

突如、ミミの腰につけてあったデジヴァイスが強い光を放つ。その光は膨大な量の情報を直接パルモンへと伝えていく。

輝く光に包まれたパルモンは体の形を変え、あっという間に巨大なトゲモンになり、

そして、小さな花の妖精リリモンへと進化を遂げた。

「リリモン、フラウカノン!」

「う、うん、『フラウカノン』!」

リリモンが両手を合わせると黄色の花が咲く。その中から出現するのは、小さな銃口。周囲の光を集めると、そこから光の弾を放つ。

既にシャッコウモンに進化しきっていたパタモンとアルマジモンも負けじと光の弾を複数発生させてリリモンの光弾を相殺させる。

それでもリリモンの攻撃の手は止まない。一切容赦の無い攻撃がシャッコウモンに降り注ぐ。

ミミは毅然とした表情でぐっとタケルと伊織を睨みつけている。

その表情は嘗ての戦いで、争いを忌避しようとした少女の姿とは到底思えないようなものだった。

それでも、他人の気持ちに敏い空は、ミミの思いが手に取るようにわかるのだった。

「……空さん、ここは私に任せてほしいの。私のわがままだってわ

かってる、でも……。」

ミミの声は、まるで押し殺したようだった。空はやさしく微笑みかける。

そして、空のデジヴァイスに光が灯り始めたのが見て取れた。

「わかってる。ミミちゃんがどれだけ優しい子なのか、私がよくわかってるよ。」

「……空さん。」

「私は全力でミミちゃんのサポートをするわ。全力で相手してあげなさい、ミミちゃん!。」

「大丈夫、いけるよ、ミミ!私、絶対負けないから!。」

リリモンは空中を華麗に飛びながら軽くウインクをする。

うつすらと涙の浮かんだ瞳をぐっと拭いて、ミミはもう一度目の前に立ちはだかる敵を見る。

本来戦いには向いていないリリモンとミミがどれだけ相手できるわからない。ただ、シャッコウモンもそうだろう。

良き相手だ。ミミはそう思う。

ミミはその言葉に力強く首で肯定の意思を見せると、三度敵を見つめた

「……ねえ、光子郎。」

「……なんです、丈さん。」

「指定が森の中って漠然としすぎじゃないかな……。」

「……大丈夫ですよ。いざとなったらテントモンもいます。カブテリモンに乗せてもらって外へ出れますよ。」

「……それで彼らと会えればいいんだけどね。」

「…………。」

ブブブ、とテントモンの羽が羽ばたく音が響く。

鬱蒼と巨大な木々が生え茂る森林地帯。そんな場所に彼らは呼び出された。

森というのは様々なデジモン達が好んで生息する場所である。

丈としては、彼らと出会って話が出来ればいいと思っていた。

だが用心深い光子郎は違う。既に臨戦態勢だ。いつどのように彼らが襲ってきてもいいように、対策を練っている。

二人の会話に多少の齟齬が生まれるのも当然かもしれない。

しかし、光子郎の心配は杞憂に終わったようだ。

「あついたいた！泉センパイ！」

明るいその声は、京のものだった。

「……京君。」

その声に、光子郎はじと目で返す。

「えへへ、やっぱり怒ってますね先パイ……。でもこれも理由があってやったことなんです！今すぐ返しますので許してください！」

そう言って片手に持ったノートパソコンのエンターキーを押す。

ぐるぐると回る情報の奔流は、今光子郎のパソコンと接続されて、元に戻るうとしている。

「はい、丈先輩、ゴマモンです。」

京の後ろにいたヒカリが、抱きしめたままのゴマモンを優しく手渡す。

「じょーおー！」

「ゴマモン！元気だったかい？」

「ぜんっぜん平気！オイラオニギリもらっちゃった！」

「テントモンもお疲れ様ー！ありがとねっ！」

一応敵同士だと言うのに、京は勤めて楽しそうに言う。

「い、いや……わてはなんも。」

ぽりぽりと頭をかくテントモン。

「それじゃ早速行きますよお二人とも！」

京がパソコンを支えている左手と反対の手を突き出して指差す。その瞬間だった。

「トップガンー！」

赤い閃光が二人を狙う。

「光子郎はん、危ない！」

「丈!!」

テントモンとゴマモンはギリギリでパートナーの二人を押しだし、攻撃から避けさせる。

木々の隙間から現れたのは、シルフィモンだ。

すこし暗い森の中で白と赤が主体の体はぼうつと浮かび上がって見える。

それはまるで突然その場に瞬間移動して来た様にも見えた。

「……あつありがとうテントモン。」

「……一体どうしてこんな事をしようと思ったんだい!？」

「そうすれば、本気で戦ってくれるでしょ、先パイたち!」

「どうして本気で戦う必要があるんですか!」

「私たちにはあるんです、お願いです丈さん、光子郎さん。……戦ってください、私たちのために。」

光子郎と丈は互いに顔を見合わせる。そして、デジモン達とも。

「丈。オイラ、やるよ。丈はめっちゃくちゃ強いんだってとこ、見せてやろうよ!」

「わてはいつでも準備万端でっせ、光子郎はん。」

「……まったく仕方ないなあ、僕らの後輩は。何か間違えたかな、僕たち。」

長く伸ばした紺色の髪をかきわけて、丈はぱりぱりと困惑したように頭をかく。

「……親の気持ちになりますと、これが反抗期って奴でしょうか。」

「反抗期かぁ。ならしょうがないか。」

「トップガン!!」

その声に呼応するように、二人のデジヴァイスが同時に輝いた。

また木と木の間から赤い閃光が迸り、地面をえぐると土煙が周りを包む。

それを切り裂くデジヴァイスの聖なる輝き。そして、その奥から、少女たちの挑発するような笑い声が響いてきた。

「何してるんですかー? あんまり遅いとまたいっちゃいますよお!」

「今度は容赦無く当てますよ。ね、シルフィーモン？」
京は無邪気にけらけらと、ヒカリはどこか妖艶にくすくすと笑うの
だった。

中学生vs小学生

「メガブラスター!!」

「ハンマースパーク!!」

重量級完全体二体の必殺技が強い光の衝撃波となって木々の間を挟む。

その威力は絶大で、あっという間に回りの木が綺麗に消えてしまうほど。

だが、それをものともせず軽々とシルフィーモンは避け、アトラカプテリモンの懐に入り込んだかと思うと軽く上段蹴りを咬ます。慌てて避けるアトラカプテリモンだったが、真後ろにいたズドモンとぶつかり、足元を取られる。

それを見たシルフィーモンは地面を跳躍し、高く跳びあがると必殺技の構えを取った。

「デュアルソニック!!」

「させるかッ ハンマーブーメラン!」

空中に留まるシルフィーモンに向け、ズドモンはハンマーを投げつけて動きを反らす。ものの見事にその思惑は成功し、

デュアルソニックが生み出す衝撃波はアトラカプテリモンを避けて、巨大な木を一本丸々切り倒した。

（……地理が不利だ。）

光子郎は考える。完全体二体だが、仲間内でもトップレベルの大きさを誇る二体だ。

もちろん繊細で俊敏な動きは非常に苦手である。しかもそれが二体、木や草の茂る森の中。

うまく立ち回りされてしまえば簡単にこちらの動きを封じることができるだろう。

（……やはり考えてきましたね……。）

今もシルフィーモンは華麗に巨木を登ったり、空を滑空しながら二

体を手玉に取っている。

今、手元にはデジモンアナライザーはない。自分の手で相手の弱点を見つける他ない。

だが今まで何度もその姿を見てきた相手ではあるし、一度個人的に調べてみたこともある。

シルフィーモンはまるで猿のように木と木を伝い、あっという間に姿をくらました。

「……木が邪魔だな。」

「少し倒しまっか。」

ズドモンはハンマーを再び投げて木を切り倒す。ゆっくりと傾いた木は大きな音をたてて倒れる。

だが、シルフィーモンの姿はいつこうに見えてこない。

それどころか突然想像もしない場所から現われる危険性が十分伴う。

「無理よ。シルフィーモンの動きにはついて来れない！」

「……悪役ごっこは似合わないよ、二人とも。」

丈がつぶやくが、彼女らに届く前に風に乗って流れ消えてゆく。

たくさんの木が生み出した障壁は何もかもをぶつけ遮ってしまう。

そう、木さえ、木さえなければ。空を飛行可能なアトラーカブテリモンならばすぐに場所移動出来る。

だが陸上での移動を苦手とするズドモンは、先回りされて終わってしまうだろう……ならば、せめて障害物の少ない空中戦に持ち込むのはどうだろうか。

「アトラーカブテリモン！出来るだけ高く上がってください！」

「はいな！」

「シルフィーモン！」

そうはさせないとばかりに京が叫ぶ。

「デュアルウィング！」

巨体をゆっくりと持ち上げていくアトラーカブテリモンに対し、高速で飛空し、距離を縮めていくシルフィーモン。

「そうか、今だ、ズドモン！」

「任せる、ブーメランハンマー!!」

「ホーンバスター!!」

即座にシルフィーモンは反応し、一直線に進むアトラークブテリモンの角の刺す攻撃の軌道から逸れた場所へと免れる。

投げ捨てたハンマーは放物線上に上がり、今さっきシルフィーモンのいた場所へとぶつかっていく。

そう、そこは現在アトラークブテリモンの進行しようとしている方向だ。

「まずいつ アトラークブテリモン!!」

それに気がついたアトラークブテリモンは慌てて避けようとするが、間に合わない。

ただちに迎撃態勢に入り、巨大な角でクロンデジゾイド超合金で作られたハンマーを突き飛ばす。

ハンマーは脇に逸れ、ズドモンのいた場所の近くに落ちる。

「……!!」

「大丈夫か、アトラークブテリモン!」

「へ、平気でっせ。ただ少し目の前を星が回ってるだけですわ……」

「

「今よシルフィーモン! 標的はそのままアトラークブテリモン!」

「ズドモン! なんとか……ッ!」

シルフィーモンは即座にトップガンの体制をとる。

しかし、空中からアトラークブテリモンを狙うには少しずれた体制をとっていることに光子郎は気が付いた。

「違います!! 標的はズドモンです! 避けてください!!」

「しまっ……」

上空から突き落とされたハンマーは鍛え上げられたズドモンですら抜くのに苦労する深さの地面に埋まっている。

すっかりそちらに気を取られていたズドモンは、用意がない。

前から滑るように転がり込むと、分厚い甲羅の中へと逃げていく。

「させへんで！」

アトラカブテリモンがそのまま勢いよく突進すれば、技の準備をしていた途中のシルフィーモンに激しくぶつかる。

「うわああッ!？」

そのまま地面に落下し、森の中へ消えていく。予想よりも着地音が小さかったのは受け身をとったせいだ。

「土のにおいが強い。向こうだ、アトラカブテリモン！」

「はいな。ここからでも着陸地点がよう見えましたわ。すぐ行きまっせ！」

二匹はやつと挽回し始めた展開に、さらに追撃をしようと急いでシルフィーモンの元へと向かっていく。

丈はその後ろ姿を見守って、感心したように言った。

「……まさかそんなフェイクを京ちゃんが使うなんてね。」

「……本当を言うと、真つ向勝負で先パイ達に勝てる自信は全くないんです。だから少しでも搦め手を使うしかないじゃないですか！まあ、ほとんどヒカリちゃんの入れ知恵なんですけど！」

賑やかな京の後ろでほとんど言葉を発せず静かに微笑を湛えるヒカリ。

「……なるほど優秀な参謀のようですね。……ですが僕も負けません。」

考えなくては。光子郎は考える。

力の差では圧倒的にこちらが有利なはずなのに、スピードと地理の差でこうも穴が埋められている理由を。

持ち前の集中力で思考の海へどっぷりと浸かろうとした瞬間、つと、丈が声をかけた。

「……光子郎?。」

「なんでしよう。」

「僕とズドモンで時間を稼いでみる。光子郎に任せたいんだ、どうやったらシルフィーモンを止められるか。」

「……わかりました。やってみます。」

「すまない。でも信じてるよ。」

光子郎がしっかりと頷くのを見守ると、丈は先に森に消えたズドモンを追って走り出す。

「私たちも追わなきゃ、いきましょ、ヒカリちゃん!。」

「もちろんよ、京さん。ごめんなさいね、丈先輩、光子郎さん。」

はしやぎながら京は走る。その後ろを、ヒカリは意味深な笑みを張り付けたまま、付いて行く。

その静寂に残されたのは、光子郎だけだった。ややあって、周りを見渡すと、光子郎はあることに気が付く。

光子郎は一人、力強く頷くと伝令をしに走り出した。

しばらく走り続けていると、息が切れる。樹にもたれかかって少しばかり休憩をしていると、羽音……いや、ロケットの炎が燃える音が聞こえてくる。

上空から光子郎の元に姿を現したのは、アトラカブテリモンだった。

「光子郎はん、大丈夫でつか?」

「僕は大丈夫。よくわかったね。」

「足音が聞こえよったんや。」

「そつか。それより、ズドモンは……。」

「心配あらへん。わてもすぐ戻るさかい。それより光子郎はん、何か思いついたんでんな?」

やはり、パートナー同士は以心伝心できるのだろうか。

自分のことを理解してくれる喜びに胸を震わせながらも、光子郎は頷くと勤めて落ち着いて口を開く。

「いいかい、よく聞いて……。」

海は光を浴びてキラキラと輝き、それに呼応するように真っ白な浜

も優しく当たりを照らしている。

しょっぱい潮風は柔らかく頬を撫でていく。

バードラモンに進化したピヨモンは自分の出番が来るのを待ち構えて、空をゆったりと飛んでいる。

そんな平和なはずの海辺の砂浜に、甲高いリリモンの声と、光線の爆発する音がこだまする。

「フラウカノン！フラウカノン！！」

リリモンのフラウカノンは元々連射には向いていない。

一度発射すると光の力を貯めるために時間が必要なのだ。

それでもできる限り早く、リリモンは打ち込む。少しでもシャッコウモンに攻撃を当てるため。

しかしシャッコウモンは時折避けながらもその場で車輪を生み出して相殺し続けていた。

それがどれだけ続いたろうか。体力の無いリリモンは既に呼吸を乱し始めていた。

それでもお構いなしにミミは二人をにらみ続ける。

伊織にとって、そんなミミの姿は全く想像もつかなかったものだったから、少しでも戦慄を覚える。

背筋に這いずるものがある。

いつも能天気で明るい、とても変わった人。伊織にとってのミミの心象はそんなものだった。

「……あたしね、戦うの大嫌いだった。」

ポツリとミミは呟く。

「ううん、今だって大嫌いよ。どうして分かるよね？」

それは何故か、伊織に向けて言っているのだと、伊織は自覚した。

「……分かります。戦いほど非合理で不要な物はありません……。」
伊織も、ぼそぼそと呟くように答えた。

タケルはミミの視線を真正面で受け止めたまま、何も答えない。

「本当よね。なんで戦わなきゃいけないの？戦う必要ってどこにあるの？傷つくだけじゃない。」

伊織はそのすべてに心の其処から頷いた。

それでも、シャッコウモンはまだ車輪を放ち続けている。

「……けどね。あの時はそんなこといつてられなかった。……そうしなきゃ死んじゃうの。皆よ？皆。自分だけじゃない、大事な人や大事なものが。」

リリモンは可憐な花の首飾りを生み出し、相手に動きを束縛しようとする。

だがそれがシャッコウモンを縛り付ける前に、やはり車輪に破られてしまう。

「すつごく辛かった。帰りたかった。」

一つ一つの言葉が、真っ直ぐで素直な伊織の心に突き刺さる。

ミミは真摯なまなざしのまま、話し続ける。同じ表情のままで。きつと心が、あのときのデジタルワールドにいるのだろう。

今でもきつと、手に取るように覚えているのだ。いつでも思い出せる。

それくらい彼らにとって三年前の冒険は、大きくて、大切なものだったのだから。

「だってそれまであたしは普通の小学四年生の女の子だったんだもの。」

ふっと、タケルの目にピンク色のテンガロンハットが飛び込んでくる。

目に痛いくらい鮮やかな赤色のロングスカート。お洒落な茶色のブーツ。

胸のうちを刻々と吐露する先輩と、当時の、今の自分より一つ年下だった頃の先輩が重なって見える。

それは、記憶に無い伊織にもそう見えたようだ。伊織は驚きの表情を隠せずにいた。

「だけど、知ったの。戦わなきゃ得られない物もあるって。守れないものがあるんだって！」

ミミがそう叫んだ瞬間、過去のミミの姿が消し飛ぶ。

既にミミは、先輩としてのミミに戻ってきていたのだ。

これは、ミミからのメッセージ。戦わない道を選んだ後輩達へ、戦闘に対する心構えがあるのかを問う言葉なのだ。

先輩達にとつて、戦いとは生死をかけたものであったのだから。

「……ねえ、本当にこの争いは必要なの？」

「……それでも……僕らには戦わなきゃいけない理由があるんです。」

「どうして……それを教えてくれないのっ！？タケル君、伊織君！？」

空が続けて声を荒げる。

伊織とタケルは観念したように顔を見合わせると、口を開いた。

「……強くなりたいんです。ならなきゃいけない。」

「……強く？」

鸚鵡返しに空が尋ねる。

「はい。強くなりたい。先輩達みたいに。」

とうとう疲労が溜まりきってしまったのだろう、リリモンはその場に着地して、態勢を整える。

その隙をシャッコウモンは見逃さない。

「アラミタマー！」

「リリモン危ないっ！ー！」

悲鳴を上げるミミ。シャッコウモンからいつそう力の籠った光の弾が発射され、リリモンを間違はなく捕らえる。

慌ててリリモンは逃げようとするが、体に力が入らない。

思わず顔を覆った瞬間、襲ったのは光の熱量ではなくて、大きな影だった。

「ガルダモン……！。」

「空が言ったでしょ、全力でサポートするって。」

リリモンを体で包み込むようにしてシャッコウモンの攻撃から身を挺して守る。

ガルダモンを襲うダメージが小さいはずは無い。それでもガルダモ

ンは悲鳴一つ上げずに、片膝をつく。

そして振り返ると、羽に全身の力を込める。

「シャドーウィングー!!」

燃え盛る羽がシャッコウモンの足元に着火し、爆発を巻き起こす。

「ねえタケル君、伊織君。もう少し話をしましょう？ 戦うのはその後でもいいんじゃない？」

空が問いかける。ミミもそれに首で肯定する。

そう、本来ならミミだって戦いは避けたいはずだったのだ。

その言葉に、伊織は揺らぐ。しかし、直ぐに首を横に振った。

「……駄目です。ここでやめてしまつては今まで準備してきた皆さんに顔向けが出来ません!。」

「もう、伊織君のわからずや!。」

リリモンは再び飛行を開始するが、既に疲労困憊状態なのは空にも見て取れる。

「……リリモン……!。」

ミミが呟くが、リリモンは可愛くウィンクをしてみせる。

「……だ、大丈夫よ、ミミ。ミミの気持ち、凄く伝わるもの。まだやれる。まだまだやるわ、私!。」

空は悩んでいた。

このままいたずらに戦闘を長引かせても、良い事は無いだろう。

寧ろガルダモンが加勢して一気に戦闘を終わらせてしまつべきだ。けれど、ミミの気持ちを蔑ろにはしたくない。

絶対に争いを好まなかったミミ。それが自分の気持ちをぶつける為に前線で戦おうとしているのだ。

「……ガルダモン!。」

「空。」

避け損ねそうなリリモンの盾を続けていたガルダモンに、そつと声を掛ける。

「……早急に戦いを終えましょう。このままじゃリリモンも、ミミちゃんも……シャッコウモンだって堪えちゃうわ。」

必死に戦っているリリモン。それを見つめるミミの表情は浮かばれない。

また無表情にふわふわ浮きながら光線を発射しているシャッコウモンにも、わずかばかりの疲労の色が浮かんでいる。

それどころか、ガルダモンだって倒れてしまっただろう。

「……分かつてる。でも……。」

ちらりと横で車輪を避けていたリリモンを見る。

「……そうなのよ。何かいい策は無いかしら……。」

「大丈夫。空は心配しないで。何とかしてみるから。」

「……ありがとう、ガルダモン。」

空はぎこちなく微笑んだ。それだけでも、ガルダモンの体に力がみなぎる。

ガルダモンは大きな翼をはためかせ、雲ひとつない上空へと飛び立った。

「ハンマーブーメラン……!」

ハンマーがぐるぐると回転しながらU字を描いて飛んでいく。

それに交差するようにズドモンの角が木々の細い隙間を縫うようにして進み、遠くの樹にぶつかり爆発をする。

生まれた爆風は丈のジャケットをも靡かせる。

広範囲を一気に攻撃して木陰に隠れる敵を炙り出す作戦だったが、功は結ばなかったようだ。

このままでは小柄な相手は森の中に姿を潜め、そして図体のでかいズドモン達の位置ばかりが判明しているという最悪な状況が保たれてしまう。

「……ダメかあ。」

がつくりとうなだれる丈。

「丈、後ろッ」

丈の背後に現れたシルフィーモンは跳躍しながら拳を突き出してきた。

ズドモンは丈を庇うようにして立ち、牽制にとハンマーを振り回す。それも踏み台にしてズドモンの背後を取る。

素早くズドモンは振り返し、尻尾をぶつけて攻撃をする。

いつの間にか細かい応戦が続く接近戦になっていた。一撃一撃の重みが高いが手数では負けるズドモンには少々不利だ。

長時間接近戦のままでいるのはとても辛いと判断したズドモンは、今一度距離を取るために、ハンマーを縦に振り下ろす。

「ハンマースパークー!!」

衝撃波の光は迷うことなくシルフィーモンを追う。

しかし既に間合いを取っていたシルフィーモンに当たる事は無い。

それこそがズドモンの狙いだ。

そのとき、暫く姿を眩ましていたアトラカブテリモンが凄い勢いで突進してきた。

シルフィーモンは軽い身のこなしで後ろに跳躍する。更にズドモンとの距離が生まれた。

「アトラカブテリモン!」

アトラカブテリモンは土煙と共にその場にゆっくりと降り立つ。

そしてそのままシルフィーモンに向かうと、

「ホーンバスター!」

角の先から光線を放つ。そして、そのまま逃げるシルフィーモンを追いかける。

固い背中の装甲は木々をなぎ倒してもびくりともしない。

「光子郎!」

後ろの草陰からすつと出てきたと思えば、そのまま全力で走り過ぎ去っていく光子郎。

「丈さん、ズドモン!今からアトラカブテリモンがシルフィーモ

ンを追い詰めます！！直ぐにこの先北東に進んでください！！」
早口で捲し立てる。彼らしくなく説明も殆どない。それでも丈は頷く。

「わかったよ！気をつけるよ、光子郎！」

「はいッ！」

赤毛の後輩の姿は森の中へと消えていく。

それを見送ると、丈はズドモンの背に優しく触れる。

「……ズドモン、大丈夫かい？。無理はしないでくれたまえ。」

「大丈夫さ。ちょっと疲れたけど。でもこれ、持久戦だろ、オイラも負けてられないさ。」

ズドモンが得意げに笑ったので、丈は釣られて微笑んだ。

「さ、もう一頑張りだ、行こう。」

「おう！」

ズドモンは肩を回してストレッチをすると、背中に丈を乗せる。

そしてそのままずしんと森の奥へと進んでいった。

狭い森の中でデッドヒートする長い長い追いかっこ。

暴走する戦闘機のようなアトラカブテリモンと、その脇を猛スピードで駆け抜けるチーターのようなシルフィーモン。

アトラカブテリモンのような防御力はないシルフィーモンは、空を飛ばずに地面を走り抜けて、障害物を突破しているのだ。

互いに横並びのまま、攻撃を放って牽制しあっている。

シルフィーモンが光の弾を放ったその後だった。

突然強い光が目に入る。

目の前が拓けたかと思うと、湿った香り。森の中に池があったのだ。足が地面から離れる。

体が宙を舞う。

それでも咄嗟の反射神経がズバ抜けているシルフィーモンは即座に体制を整えようと試みた、だが。

「ハンマーブーメラン！！」

水中からハンマーが突如飛び出してきた。いつのまにかズドモンが水中にいてはいないか。

そう、アトラカブテリモンはわざと大回りをするようにシルフィーモンをこの池に誘導していた。

ズドモンが休憩し、移動する時間を稼ぐために。

重たい体を長時間フルパワーで稼働させた疲労と、障害物を力技で抜けてきたダメージは割と大きかったようで、湖の岸にたどり着くと、アトラカブテリモンはモチモンへと退化した。

その場に座り込んで荒い呼吸を整える。

そのころ、完全に不意を突かれた形になったシルフィーモンは、今度こそ完全に体のコントロールを失った。

まっさかさまに水中に落ちる。

攻撃がクリーンヒットしたシルフィーモンに、もはや抗える術は残っていない。

ズドモンはシルフィーモンの体を引っ張ると、丘に戻してやった。すると倒れていたシルフィーモンから淡いピンクの光が溢れて、プロットモンとポロモンへと退化した。

2匹は疲れてぐったりとその場に横になっていた。

二人は駆け寄ると、2匹を優しく抱きしめた。

「お疲れ様、ポロモン。」

「ごめんねヒカリ……。」

「頑張ったね、プロットモン。」

「さすがに、ダメでちた……。」

そして、戦闘する必要が無くなったズドモンもプカモンまで戻る。既に湖に待機していた光子郎と丈も、互いのパートナーを労わってやる。

「すごかったよ、モチモン。」

「照れるでんがな。」

「さすがプカモン。」

「まーね！これくらいオイラにとってはどってことないよ！」

「……先パイ、正直最初手加減してたでしょー。全力でつて言ったのに！ヒドーい！」

光子郎は見透かされたことに照れたように笑う。

「僕の了見が甘かったんです。」

「けど、よくわかりましたね、あんなところに湖があるなんて。」

ヒカリが呟くように問う。

「……森の奥には湖があるものですよ。それに……この付近の木の形、見覚えがありました。」

前述したが、一度デジタルワールドが崩壊の危機に陥った時、世界は全てが混ざり合って地殻変動を起こした。

その為、本来なら彼らの過去の記憶ですらあまり宛てにはならないはずなのだ。

「……そうだね。」

それでも、横にいた丈も同じように同意する。

「もうとつくに森の木の種類もばらばらに混ざり合ってるけど、……でも僕にもわかるよ。ここは、僕らが最初にたどり着いた湖だ。」

ファイル島の、中央の浮島に電車がぼつんと置いてあった湖。

皆で狭い電車の中で横になった。まだ不安だらけで、仲間同士でもぎこちなさがあった頃。

そこでは初めてガブモンがガルルモンに進化した。懐かしい記憶だ。三年前共に戦ったヒカリすらも知らない、思い出だった。

「……地の利はあると思っただのにな……最後の最後にそれで逆転されちゃうなんて。」

ヒカリはがっかりしたように肩を落としながら、それでもきれいに微笑んでいた。

「うんうん、さっすが泉先輩！」

京は既に光子郎を褒め称えるスイッチが入っている。

「さて、どうしてこうなったのか、きちんと理由を話してくれませんか。」

モチモンを抱いたまま、光子郎が立ち上がる。その眉は軽く吊りあ

がっている。

「……そ、それは……。」

京が気まずそうに明後日の方向を見出した。その瞬間、京のD・タ
ーミナルがメールの受信音を発する。

京は慌ててポケットからD・ターミナルを取り出し、画面を出す。
それは京がいつもパソコン関係の情報を交換している友人からの連
絡だった。

「……った、大変ですッ！ 泉先パイ、これ……!!。」
皆に画面が見えるようにそれを向ける。

既に受信したメールは開いているのだろうが、動作が非常に緩慢だ。
「……世界各地で電子機器の異常反応……？ 処理速度の著しい低下
……なんですって!!？」

京はそのまま持ってきたノートパソコンの調子確かめる。

電源を入れるが、なかなか立ち上がらない。

「まさか、それって……。」

ヒカリが心配そうな顔で京に尋ねる。

「ええ、多分そうよ。……ネット上ではデジモンの仕業じゃないか
って噂になり始めてるんですっ!!。」

「一体如何して……!？」

丈があたりを振り返ると、巨大な細い竜のようなデジモンが湖で泳
いでいるのが見えた。

あれは、そう、見覚えがある。

「……シードラモン!？」

その声に警戒した一同は皆同時に振り向くが、その影も形も消えて
いた。

「見間違い……か? いや、今確かに……。」

「……うそ、なんで……! ? 何よコレ……! ?」

京がスイッチを入れたノートパソコンも、動きが鈍足だ。

それどころか、デスクトップをコミカルな絵柄で埋められて、全
く動作をしない状態だった。

「……このままではネット回線に繋がる器具が全てやられてしまいます！一度全員集まり現実世界に戻って状況を調べましょう。」
「そっだね、急ごう。」

「……やめましょう、タケルさん。もうこれ以上は無意味です！。」「一行に動きを見せない戦いに、焦れた伊織はタケルに訴える。今もリリモンがシャッコウモンに向かってはいるものの、ただただ辛そうにしているだけだ。

自分達がしたいのは強敵との戦いであって、弱者の蹂躪ではない。だからと言ってガルダモンに攻撃をけしかけても、挑発には乗ってこないだろう。

だが、タケルは少しも表情を変えないまま、静かにシャッコウモンの背中を見つめている。

「……諦めないんだよ、伊織君。」

突然、ぼそりとタケルが呟いた。

「え？」

「あの人たちみんな物凄く頑固な人たちばかりだからね。一度決めたことは諦めたりしないよ。絶対。」

顔を上げたタケルには、どこか希望に満ちた光が宿っていた。

「リリモン！」

「なあに、ミニ。」

「……リリモンは、諦める気ないのよね？」

「何言ってるのミニ、ミニだって本当はここで譲りたくないでしょう？私のためにやめようって思ったんでしょ？」

その言葉にミニは諦めたように笑った。

「リリモン、一度引いて誘き寄せるの。飛ぶだけでいいから。できる?」

「……ミミ?」

「一人で出来ないなら、二人でやれば絶対いけるわっ! 私たちが最強タッグだってこと、見せてあげましょ、リリモン!。」

「でも……。」

リリモンは熱くなる胸を押さえながら逡巡する。もしパートナーのミミの身に何かあったら自分の存在理由が分からなくなってしまっているのではないか。

「私たち、ずっと二人で協力してきたじゃない!。」

あれはいつだったか。一足早く戦いを開始している太一たちのもとへ一刻も早く着きたくて、際どい崖をロープで登ろうとしたとき。体力の無いミミはあつという間にギブアップして、少しも動く事が出来なかったけれど、空を飛べるリリモンが一生懸命押してくれた。それでもなかなか上に上がる事は出来なかったけれど、でもそれは確実にミミを助けてくれた。

「ミミ……うん、ありがとう……!。」

パートナーが自分のことを想ってくれる気持ちは直接力になる。今の今までへろへろだった体に力が沸いて来る。リリモンはもう一度羽を飛ばたかせて空を飛ぶ。

障害物の無い浜辺のうえを、飛び回る。

「……なんだ!?」

「私はこつちよ、シャッコウモン! 当てれるものなら、当ててみなさいよ!。」

シャッコウモンは突然の事に驚く。

だが、元々遠距離戦はシャッコウモンの得意分野である。既に出し飽きてきた車輪や光線で彼女を捕らえようとするが、すばしっこい彼女にはなかなか当たらない。

重い体をゆっくりと動かして、リリモンの後を追う。

海の上や浜辺の上をぐるぐると飛行する。時折互いに武器である光

を放ちながら。

そして、長く続いた鬼ごっここの末、シャッコウモンはとうとう高台の丘の下にリリモンを追い込んだ。

「これで、チェックメイト。」

シャッコウモンがその眼に10万度の高熱を集め出した、そのときだった。

「やああー!!」

甲高い掛け声と共に、丘の上から跳んでくるものがあつた。

シャッコウモンの顔を覆うように、ミミはシャッコウモンにしがみつく。

「リリモン、今よ!!全力を込めて攻撃して!!。」

「ミミ、ダメ、危ない!!。」

前が見えないのか(少し怪しいが)、じたばたと暴れるシャッコウモン。

もう一度眼に熱を貯めたその熱さでミミを引き剥がそうとした、そのときだった。

黒い影がシャッコウモンの頭上を過ぎる。それはギリギリに近づいたと思うとミミを連れ去り、その足で踏み倒すと近距離で放つ。

「シャドーウイング!!。」

その場に倒れこんでいたシャッコウモンに、凄まじいダメージを与えた。

リリモンはそれに追撃するように、両手を合わせた。

「フラウカノン!!。」

全身全霊をかけた一撃。

それは既に力を失っていたシャッコウモンを強く押し出し、海の中へ落としてしまう。

シャッコウモンはそのまま、トコモンとウパモンへと退化した。

気を失っている二体はぶくぶくと海の底へと沈んでいく。

それにいち早く気がついたミミが、海の中へ飛び込もうとしたそのときだった。

白い影がミミの横を風のように過ぎ去ると海の中へと飛び込んで、消えていく。

あまりの突然の出来事に、ミミはぼかんと口をあけていた。

「ミミちゃん、やった、やったね!!」

遅れて空が浜辺を走ってくる。

「よく頑張った、よく頑張ったよ……!!」

そして、本当に嬉しそうに空はミミを抱きしめた。

「あ、ありがとう……空さん……」

ミミが呆気にとられている間に、リリモンとガルダモンが、タネモンとピヨコモンへと退化していた。

「ミミ、ミミ、ミミい！びっくりしたよお、ミミィ!!」

「空、ミミ、頑張ったね!!」

そうして二人と二匹は全身で喜びを分かち合うのだった。

「ウパモン!!」

「トコモン!!」

遠くにいたタケルと伊織が叫びながら慌てて走ってくる。

横で先程の白い影が水の中から戻ってきていた。

白い影の正体は、真っ白で淡い色のワンピースを着た、一人の少女だった。

彼女はトコモンとウパモンを抱いて、海中から出てきていたのだ。

「危ない所だったね。」

少女は微笑みながら、二匹を手渡す。

伊織とタケルは慌ててぎゅっと抱きしめた。

「ごめん、ごめんね、ウパモン……」

「伊織い、気にするなだぎゃ。」

「トコモン……ありがとうね。」

「いいよ、タケル……」

「タケル君、伊織君。」

顔を上げると、空がその場で怒りを湛えた目で睨み付けながら、仁王立ちしているのだった。

「どうしてこんな事をしたのか教えなさい。強くなりたいって、どういうこと？」

「……さっきも言いましたけど、強くなりたかったんです。」
「強く？」

「……最近、余り良くないウィルスが出回ってます。それはデジモンの仕業が高いそうなんです。」

その言葉に、空は少し怒りを納めて目を丸くする。

「……新種のデジモンなの？それって！」

「はい。でも僕たち究極体にはなれないし……もし敵が来たときにやられたら嫌だから。だから、空さんたちの強さを学んで、実践してみたいって思ったんです。」

「……ならどうして最初からそうだって言ってくれなかったの。」

「言ったら本気で来てはくれないでしょう、空さん。」

「言ってくれたらとことん付き合っただけだよ！。いい？今度は勝手にそうやって思い込んだりしないで、一度私たちに相談してみること。わかったわね？」

「……はい。」

ややあつて、伊織が口を開いた。

「あの……助けてくれて有り難う御座いました。」

少女は楽しそうになっこり笑った。天真爛漫な笑顔だと、伊織は思う。

「私ね、友達探してるの。知らない？」

「友達？」

「そう！飛び切りパーフェクトでスペシャルですんごい友達！もうすぐ会えるの……！」

その説明に、4人と4匹は困ったように首をかしげた。

「……友達の見え目とか、名前とか、そういうのを教えて欲しいんだけど……。」

「知らない！会った事ないの！」

少女は笑顔を絶やさずに、それでいてきっぱりと言う。

「貴方の名前は？」

「……私……イクスモン。」

「イクスモン！？」

四人と四匹がシンクロしながら叫ぶ。

「えっ、きみ、デジモンなの！？」

「……うん、そうなの。まだ生まれたばかりだよ。」

「……デジタマから！？」

「……わからない。記憶に無い。」

「……こんなに普通の人間みたいなデジモン、見たことはありません……。」

愕然としながら、ぼそりと伊織が呟く。

「ねえねえ、何か技みたいなのは出したり出来ないの？」

「技……うーん。あ、でも。」

少女は軽くその場を蹴る。するとまるで彼女の体が風船で出来たかのように、軽く空を浮かんだ。

「これくらいかな。」

そしてもう一度少女は地に戻る。

「きつとキミ達も私の「友達」だと思うの！ね、一緒に友達に会いに行きましょう！」

そう言つて、イクスモンと名乗ったデジモンは空とミミの右手をとる。

ほんのり紋章が瞬いた気がした。

「……ごめんなさい、私たち、今から仲間の下へ会いに行かなきゃいけないの。」

「なかま？」

「友達みたいなものだよ。」

タケルが勤めて笑った。

「ふーん。……私も友達になりたいな。友達、いっぱい欲しい！」

空はアレンシーに気付かれないよう、そっとピヨコモンたちに合図を送る。

ピヨコモンはすぐさま理解して、空の腕から飛び出した。

「ねえ、わたしたちとももだちになりましょ！」

「わ、きみたちは、デジモン？」

続いてタネモンも、ウパモンもトコモンも飛び出して、イクスモンに纏わり付く。

一瞬だけイクスモンの姿が揺らいだ。

「そうよー！イクスモンの仲間よー。」

その様子を尻目に、空とミミとタケルと伊織の四人はこそこそと相談を開始する。

「……………どうする？」

口火を切ったのは空だった。

「……………易々と連れて行ってよいものでしょうか……………」

しゃがみこんでデジモン達を会話をするイクスモンを一瞥しながら不安げに呟く伊織。

「見たところは無害そうだけどね。」

タケルは軽く感想を述べる。

「……………京ちゃんや光子郎君に相談するのが一番いいと思うな。私たちじゃなんにもわかんないだもん。」

「そうですね、僕もそれに賛成かな。光子郎さんなら何か分かるかもしれないせん。」

「……………それまで一緒に居るといことですね。」

「まあ、そうなるわね。光子郎君たちのところへ連れて行ってもしばらく御守りすることには変わり無さそうだけど。」

溜息と一緒に空が言う。

「こんな所に放置しておくのもなんだかかわいそうじゃない。」

「確かに。」

「じゃあ皆の所へ連れて行くということで、いいわね。」

全員が頷くが、慎重派の伊織だけは少し重かった。

「よし、行くぜッ！ 大輔、賢！！」

太一とヤマトの目の前に対峙する二人の背後上空をインペリアルドラモンが陣取っている。

太一のデジヴァイスが光る。

「いつとくが、容赦はしねえぞ？」

歯を見せて笑う太一に先輩としてのの、そして「戦士」としての威厳が宿る。

彼の恐ろしい所は、熱血漢で明るく朗らかに見えるその実、正確すぎる冷酷さを併せ持っている部分だとヤマトは思っている。

三年前のヤマトが求めて求めてやまなかったそれを、太一は生まれながらにして持っていた。

そして、当時のヤマトにはそれが理解出来なかった。

「望む所っす！！」

「お願いします。」

賢と大輔がそれぞれ答える。

太一のデジヴァイスは強い輝きをアグモンに放つ。

膨大な量の情報を得たアグモンは、グレイモンへと進化した。

「……おい、太一、何を……。」

ヤマトは戸惑う。

デジモンの最強ランクは究極体。それに進化させるには、成長期のアグモンから一気にさせなければならぬ。

グレイモンに、成熟期にした場合は進化させられるはずがないのだ。本気で戦うからには、絶対に究極体同士の戦いとなるのだとヤマトはてっきり思っていた。

だが、太一は相変わらず余裕の笑みを浮かべたままだ。

「だがその前に。まずは同じレベル同士で戦って、様子を見てから

だ。デジメンタル、使ってもいいぞ。」

「太一……。」

「いいよな、ヤマト。」

「……ったく、しょうがないな。何でもそうやってすぐ勝手に決めやがって。」

ヤマトもしぶしぶではあるがそれに倣う。太一が何も言わずに物事を進行させていくのには慣れている。

そして、何も考えて無いように見せて、遙かにいろんなことを考えているのだという事も、ヤマトは理解していた。

無謀に見えたその行動は、最短距離で安全策を取る為であることも。賢と大輔は顔を見合わせ、頷いた。

それを反映し、インペリアルドラモンはワームモンとブイモンへと戻る。

そして直ぐにエクスブイモンとスティングモンへと進化した。

グレイモンとガルルモン、エクスブイモンとスティングモンが、太一とヤマト、大輔と賢と同じように正面に向かい合う。

「……理由は聞かないのか。」

エクスブイモンが尋ねる。

「ああ、信じてるからな。」

グレイモンは強い眼差しで二匹を見つめながら即答した。

その様子に、エクスブイモンたちはうつすらと笑みを浮かべた。

「それは俺たちも一緒さ。」

皆、きつと気持ちは同じなのだ。

「さあ、始めようぜ!。」

太一がそう叫ぶと、グレイモンは待っていたとばかりに口から巨大な火の玉を吐き出す。

「メガフレーム!!」

エクスブイモンとスティングモンは爆風と共に飛び出してすぐに避ける。

それを追うようにガルルモンとグレイモンは走る。

「フォックスファイヤー！」

ガルルモンがエクスブイモンに向けて青い炎を吐く。

「エクスレイザー！」

それを迎撃するエクスブイモンは胸の模様から熱線を放った。

両者が空中でぶつかり、煙と風を巻き起こす。

悪い視界を潜り抜け、グレイモンは再びステイングモンへと炎の弾を放つ。

だがステイングモンは空高く跳躍し、グレイモンの後ろ側に回ると瞬時に攻撃態勢に入る。

「スパイキングフィニッシュ！」

移動速度の遅いグレイモンにとって、後ろは完全な死角。

だからこそそれを長い尻尾を振り回し、カバーする。

急なスピードで襲い来るグレイモンの尻尾から逃れるため、ステイングモンはもう一度跳躍せざるを得なかった。

その隙を突いて、ガルルモンが再び青い炎を吐き出すが、ステイングモンは軽々と避ける。

ステイングモンの影からガルルモン目掛けて飛び出したのは、エクスブイモンの拳だった。

瞬発力の高いガルルモンも、流石に避け切れず、その拳を体で受けてしまう。

「ガルルモン！！」

「いけっグレイモン！」

太一はグレイモンに構うなど言わんばかりに叫ぶ。

了承したグレイモンは、そのまま巨大な角でエクスブイモンへと突進する。

猛スピードで進行する巨体に、今攻撃したばかりのエクスブイモンは避けきれずに胸でその攻撃を食らってしまう。

重量の乗ったその攻撃は、まさしくミサイルのよう。エクスブイモンは上空に跳ね上げられる。

それを止めようとステイングモンは高い空から急降下し、その手の

剣でグレイモンを突き刺そうと狙い来る。

だがそれすらもグレイモンは剣の切っ先をそらすように受け止めて、ステイングモンを跳ね飛ばす。

その間に体勢を戻したガルルモンがエクスブイモンに向けて牙を向ける。

エクスブイモンの体は地面に叩きつけるより先に、ガルルモンの顎の中だった。

「……くっ……。」

賢が焦るように小さな声を漏らす。

それを励ますように、大輔は言う。

「さすがだな、先輩……。でも俺たちも負けてらんねーぜ！な、賢！！」

「あ、ああ……。」

大輔の激励はいつも考えがちな賢を明るく前に進め、気持ちを払拭してくれる。

けれど、賢は今のままでは到底敵わないと思う。なんとかしたいと焦燥する。

そのときだった。

グレイモンが地面に突っ伏していたエクスブイモンを角で拾い上げると、その強靱な顎で挟み込む。

その場にぎりぎりと、骨の軋む嫌な音がする。

「ぐ……、うあああッ！！」

「エクスブイモン！？」

助けに行こうとステイングモンはもがくが、ガルルモンの足に押さえつけられていて身動き一つ取れない。

そればかりかガルルモンは再び口の中に青い炎を灯そうとしているのが分かる。

「……お前ら、ちつとばかり俺を信用しすぎてねえか？」

口元は笑っているが、目が笑っていない冷やかな太一の笑み。

「言ったよなア、容赦はしねえって。」

「お、おい……太一……ッ！」

「うつせえヤマトは黙ってる。」

太一の一喝が飛ぶ。

「……本気で戦いたいんだろ？」

その間も、ぎりぎり、みしみしと嫌な音が響く。

「……そうだ。ありがとう御座います太一先輩ッ！やっぱ先輩はすげえや。」

それを聴いた瞬間、グレイモンはエクスブイモンの拘束を解いてその場に投げ捨てた。

突然賛辞の言葉を述べる大輔に、賢は戸惑いを隠せない。

「賢、ジヨグレスだ！もう一度インペリアルドラモンにするぞ！！。」

「えっ、でも……。」

「早く！」

「……なるほど、そういうことが、太一。」

「やーっとわかったか。ほら、俺たちも行くぞ。」

デジモン達が各々の光を灯す。グレイモンはそのまま小さくアグモンに、ガルルモンもガブモンへと戻る。

太一とヤマトの胸に宿る紋章が輝く。

そして、もう一度全員のデジヴァイスが煌々と強い光を放った。

「……そりゃそうだよ、馬鹿だ俺って。これじゃ太一先輩達に手エぬいて貰ってるのに何も変わんねえじゃん。」

大輔ははつきりと、力強く呟く。そこで、少しずつ賢も理解し始めた。

「俺たちは強くなりたいから、先輩達に戦いを申し込んだんだ。」

「……ああ。」

「……多分先輩達、本気を出せなかったんじゃない。出したくなかったんだ。」

優しいから。光に包まれてどんどん大きく姿かたちを変えていくエクスブイモンたちの後姿を真っ直ぐに見詰めながら、大輔は独り

言のように話す。

三年前の生死をかけた大冒険。それは本当に、文字通り命が懸かっていたのだ。

殺す必要がないとか、殺したらいけないだとか、そんなことは言ってられない状況だった。

倒さなきゃ、相手を殺さなきゃ自分が、仲間が死ぬという極限の状況。

それが自分達が羨望した先輩達の強みで、強さの秘訣だったのかもしれない。相手に寸分の猶予の余地も与えない、敵への冷酷さ。

太一は身を持ってそれを知らしめようとしているのだ。それが、どんな意味を持つのかは分からない。

何故ならそれは受け手の解釈によるのだから。

「……本宮。」

ぼそりと賢は呟いた。

「……いいんだ、本宮は本宮のままで。本宮には本宮の強さがあるんだから。」

大輔の強さは、その寛大さと優しさだと、賢は誰よりも感じている。そんな彼に、少なからず自分は救われてきたのだ。

「……賢……。へッありがとな！」

大輔は照れたように人差し指で鼻の下を掻く。

「じゃあ俺は俺の、このままでもっともっと強くなるとするぜ！今からしつかり太一先輩達に鍛えて貰う！」

「僕もだよ、本宮。……頑張ろう、インペリアルドラモン。」

「ああ、任せろ。大輔、賢！」

光が完全に収まり、インペリアルドラモンと向かい合うは二体の究極体。

圧倒的、明らかに不利。それでも大輔は笑っていた。

「お願いしますッ！太一先輩、ヤマト先輩！！。」

「全力で来い、二人とも！！。」

「こっちも全力を出させてもらっ！」

ウォーグレイモンが地を蹴る。メタルガルルモンが後ろに待機したまま腹部のハッチからミサイルを放つ。

インペリアルドラモンはそれを迎え撃つべく一直線に突っ込んでいった。

と、真っ直ぐに進んでいたウォーグレイモンが横に身をかわす。すると後ろから飛んできたミサイルがインペリアルドラモンの顔面にぶつかる。

激しい爆風が巻き起こり、少しはなれた場所で立っていた大輔と賢の二人を吹き飛ばす。

「うわああっ！！」

そうして怯んだ隙をウィーグレイモンが両腕のドラモンキラーで刺す。

竜属性、ドラモンと名の付くデジモンに絶大な効力を誇るドラモンキラーでの一撃は、大きい。

インペリアルドラモンは悲鳴を上げながら地面に落ちる。

それでもなんとか受身を取ろうと滑りながらも両足で踏ん張った。固い土も深く抉れる。

更に追撃しようとするウオーグレイモンとメタルガルルモンに向けて、インペリアルドラモンは体制を整えながらも背中中のミサイルの焦点をあわせる。

「ポジトロンレーザー！！」

ウォーグレイモンとメタルガルルモンは進行する足を緩めて避ける。インペリアルドラモンはその隙に一気に間合いを詰めて、体の前に隠してあった剣を向けた。

瞬時にドラモンキラーを盾にして、インペリアルドラモンの攻撃を受け止めるウォーグレイモン。

それを放置するメタルガルルモンではない。横から直ぐに飛び掛って体当たりを仕掛ける。

再び間合いが開き、今度こそ地面に叩きつけられるインペリアルドラモン。

「インペリアルドラモン……!!」

本当ならば、今すぐにも戦いをやめさせて抱きしめてやりたい。
でも決めたから。耐えると。

この心の痛みに。

「……大丈夫。やれる。やるんだ、俺たちはっ!」

大輔は隣のジヨグレスパートナーを見つめる。視線が一つに結ばれる。

そして、互いに頷きあう。

インペリアルドラモンに、二人の鼓動が伝わる。

上空から必殺技を発動しようと構えていた二匹に向けて、彼らの真下に入り込んでポジترونレーザーを再び打ち込む。

「ガイアフォース!!」

巨大な大気力が凝縮された光の弾が振り下ろされる。

「コキユートスプレス!!」

メタルガルルモンの口からは絶対零度の冷たい息が青い光を浴びて
発射される。

空中で、三つの究極体の力が直接ぶつかり大爆発を起こす。

煙はあたりに広がり、総ての視界を覆い隠した。

強風は吹き荒れて総てを吹き飛ばしていく。

耐え切れなかった賢と大輔はその場を少しだけ転がった。

暫くの後、徐々に硝煙は薄く消えていった。

すると、何故か賢と大輔のD-3が光を放ちだす。

その光の先、爆心から現れたのは、つんつんと重力に逆らう紺髪に、
金色のデジモン文字を装飾されたフレームの青いサングラス。

全身を包む青い外套に。片手には長い鞭を握り締めたまま、ふわり
と浮いている。

そう、それはかつてデジタルワールドを混沌に貶めた…。

「デジモン、カイザー……!?!」

賢が茫然としながら呟く。

既にデジモンカイザーは大輔たちの手によって消滅した。

それどころか、デジモンカイザーの正体はここにいる一乗寺賢だっ
たはずだ。

インペリアルドラモンは既に消えて、退化した二匹が地面に横たわ
っている。

D-3の光はデジモンカイザーの片手に集約されているようだ。そ
して、突然ぷつりと光の帯は消える。

デジモンカイザーはそれを見下ろして、得意げに小さなリング状の
光を片手に握り締めている。

そして、にやりと得意げに笑った。その笑顔は紛れもなくデジモン
カイザーそのものだった。

「見つけたよ。紋章の力。」

くるりと後ろを振り返り、同じ高さに浮いているウオーグレイモン
とメタルガルルモンを一瞥してから、太一とヤマトを見下ろす。

「こいつらのジョグレス進化のパワーはボクが頂いた。取り戻した
かったら紋章を持つものを集めてボクの城に来るんだ。」

ジジジ、とデジモンカイザーの姿が揺らぐ。

(……幻覚か……ッ!?)

賢がそう口にしようとした、瞬間だった。

一瞬姿がブレたと思うと、それは形が変わる。天に昇る茶色の髪。

青いヘアバンドにゴーグル。青が基調のシャツに輝く一点の星。

長い白い靴下に、スニーカー。白い手袋。

その後姿は、自分達と背丈が変わらないけれど、よく知っている雰
囲気なのは大輔には分かっていた。

あの頃から、既に知っていたはずだ。自分は。でも、にわかには信
じられなかったのだ。

一方、正面から見えているウオーグレイモンとメタルガルルモン、そ
して太一とヤマトは愕然とした表情を浮かべていた。

目の前にいるのは、3年前の太一の姿だ。性悪そうな笑みを浮かべ
ているので、本人ではないのは明らかだったが。

「た…太一……!?!?。」

「ははははッ！便利だろ！？自由に姿を変えられるんだぜ。」

「それ」はわざと太一の口調を真似てみせる。

「……みすみす目の前に出てきて逃せるかッ！コキュートスプレス
！！」

メタルガルルモンは容赦なく冷気を吐き出す。

だが悠々と太一の姿をした「それ」は避ける。そして自在に伸縮する鞭を使って、ウォーグレイモンの片足を縛り付けると、メタルガルルモンにぶつけて攻撃をけしかける。

バランスを崩した二体は遠くへ落ちかける。

「まあキミ達には選択権は無いよ。待つてあげるから、おいでよ。」

「待てよ、まだ話は……！」

いつの間にかデジモンカイザーの姿に戻ったそいつは心底気持ちよさげに空を闊歩する。

「ああ、案内が必要？大丈夫さ、すぐボクの城は分かるようにしてあげるから！」

そして、また一瞬、見知った誰かに姿を変えたと思うと、その場から姿を消した。

「……今の、タケルだった……。」

ヤマトがぼそりと呟く。

「……やっかいだな、あいつ。」

「……とりあえず、集合場所に帰ろう。」

「ああ。……大丈夫か、大輔、賢。」

大輔と賢はパートナーを抱いたまま頷く。

「それより、急ぎましょう。皆さんにいろいろお話したいこともありますから。」

そうして一同は再び一つの場所に集まるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6030o/>

デジモンアドベンチャー02 夢の続きのリザレクト

2010年10月31日03時33分発行